

「ブラザー軒」（高田渡）という曲

八月、お盆のころになると思い出す曲がある。「ブラザー軒」という曲だ。

フォーク歌手の高田渡（たかだ わたる）が、詩人の菅原克己の詩に曲をつけて発表し、フォーク好きにはよく知られている。舞台のブラザー軒は仙台の青葉区東一番丁にかつて実在したレストランである。

東一番丁、ブラザー軒。硝子簾がキラキラ波うち、あたりいちめん氷を噛む音。

死んだおやじが入って来る。死んだ妹をつれて 氷水喰べに、ぼくのわきへ。

色あせたメリンスの着物。おできいっぱいつけた妹。ミルクセーキの音に、びっくりしながら細い脛だして 椅子にずり上る。外は濃藍色のたなばたの夜。

肥ったおやじは小さい妹をながめ、満足気に氷を噛み、ひげを拭く。

妹は匙ですくう白い氷のかげら。ぼくも噛む白い氷のかげら。

ふたりには声がない。ふたりにはぼくが見えない。おやじはひげを拭く。妹は氷をこぼす。

簾はキラキラ、風鈴の音、あたりいちめん氷を噛む音。

死者ふたり、つれだつて帰る、ぼくの前を。小さい妹がさきに立ち、おやじはゆつたりと。

東一番丁、ブラザー軒。たなばたの夜。キラキラ波うつ硝子簾の向うの闇に。

戦時中、仙台も空襲で焼け野原になっている。父親と幼い妹はその時に亡くなったのだろうか。八月お盆前、仙台七夕まつりの夜、二人は氷水を食べに降りてきてまた帰っていくのだろう。

高田渡は、一九六〇年代の終わりに関西フォークの中心人物の一人として知られるようになり、その後東京に移って音楽活動をした。

初期は、反戦や政治・時事を皮肉たつぷりに取り上げて話題となったが、そのころの曲は、フォークソングというものには反戦や政治的な主張・プロテストを盛り込まなくては、と無理をしているように私には感じられて仕方ない。

その後、現代詩に曲をつけて歌うことや、自らの日常の様子を自然に歌うことを始めるのだが、それらの曲の中にたくさんの傑作が生まれている。ギターを静かに爪弾きながら、つぶやくように語りかけるように歌う曲とその風貌は独自の世界である。

大酒飲みだったとのことで、ライブの前から飲みだしてしまい、ライブ中に居眠りをした、椅子からずり落ちて仲間に運び出された、などという逸話のある人だ。

二〇〇五年、北海道でのライブのあとに心不全で倒れ、たくさん名曲を残してあの世へと旅立ってしまった。五六歳であった。

彼の曲は、動画投稿サイトで検索するといくつも出てくる。ギター好きの私であるが、ブラザー軒だけは歌ってみようと思わない。それは、この曲は歌というより「語り」に近く、高田渡にしか歌えないからだ。

「生活の柄（がら）」や「自転車にのって」は、自分でギターを弾いて歌うこともある。